

第24回「日本絵本賞」選考報告

松本 猛

(第24回「日本絵本賞」最終選考委員長)

2月19日、第24回「日本絵本賞」最終選考委員会が東京都千代田区の毎日新聞社で行われた。選考は、2017年10月から2018年9月までに刊行され、全国SLA選定委員会で合格した838点(うち翻訳絵本219点)の中から最終選考に残った30点(うち翻訳絵本13点)を対象に行われた。事前に選出した、A評価4点、B評価4点の作品を発表し、一人だけしか支持のない作品をはずし、二人以上の支持があった作品について、ディスカッションと投票を行い作品の絞り込みを行った。

前回に続き、翻訳作品に秀作が多いという話が出たが、中でも翻訳絵本賞を受賞した『あめだま』は、5名中4名がA評価をつけ、日本の作品の中では、大賞を受賞した『もぐらはすごい』が5名中3名がA、1名がB評価で支持を集め、高く評価された。

日本絵本賞大賞を受賞した『もぐらはすごい』の主人公モグラは童話や絵本ではなじみ深い動物だが、土の中に住んでいることもあり大半の人は姿も見ることがない。ページを開くたびに「そうだったのか」「なるほど」と思いながら、モグラの生態を楽しく知ることができる。魅力のポイントは、ひと目で生態が分かる画面や、人間との比較などの工夫を凝らして能力を分かりやすく伝える本作りが見事なことだ。たとえば、モグラがどのように土の中で穴を掘って進むのかを語る場面では左ページにてのひらの拡大した図を示し、右ページで上から見た平泳ぎのようにぐいと土を後ろに回す仕草を2場面に描く。次のページをめくると、その力の強さが説明される。左ページでは土を地上に押し出す姿が描かれ、右ページには小さな女の子が巨大なお相撲さんを4人持ち上げている姿を描き、力の強さを人間との比較によって示す。同様に、1日にどのくらいの量を食べるかという説明では、左ページにモグラと食べるミミズの数、右ペ

ージに男の子とご飯を盛った茶碗を94杯描く。もちろん地中の断面図もたくさんあり、見えない世界を可視化する。また、科学絵本であるにもかかわらず、捕食者であるフクロウに襲われるというドラマティックな物語的要素を組み込み、読み物としてもドキドキさせる演出がある。大量の情報量が詰め込まれているのに文字と絵が見事にデザインされているために読みやすい。

『大根はエライ』は大根という野菜がどういふのかを、大根に人格を与えることによって、面白

(第24回日本絵本賞大賞)



『もぐらはすごい』
アヤキアキコ/作、川田伸一郎/監修
(アリス館)

〈第24回日本絵本賞〉



『大根はエライ』
久住昌之／文・絵
(福音館書店)

〈第24回日本絵本賞〉



『たぬぎの花よめ道中』
最上一平／作、町田尚子／絵
(岩崎書店)

〈第24回日本絵本賞翻訳絵本賞〉
〈第24回日本絵本賞読者賞【山田養蜂場賞】〉



『あめだま』
ベク・ヒナ／作、長谷川義史／訳 (プロンズ新社)

く、楽しく理解できる。いわばエンターテイメント科学絵本。大根おろしや刺身のツマになることから「脇役に徹している役者さんみたいだ」と語り、それが「エライ」につながっていく。たくあんやたくさんの漬物、汁物の具をはじめ、さまざまな料理に重宝されることを示し、なるほどと納得させる。「大根役者」や「大根足」という言葉の説明もさり気なく入って雑学を学べるのもいい。黒の太く柔らかな線でしっかり輪郭を描いた絵は親しみやすく、大根の白さを引き立たせる。人物描写ならぬ大根描写が細やかで、読者を次第に大根好きにさせる物語の展開は心憎い。楽しく温かい絵と文を通して、大根の本質を歴史的にも哲学的にも解き明かす新しい形の科学絵本。

『たぬぎの花よめ道中』は、山里に住むタヌキの娘が東京の皇居とおぼしき場所に住むタヌキのもとへ嫁ぐまでの珍道中を描いた絵本。結婚式に参加するタヌキたちは人間に化けて電車に乗り、ビルが林立する夜の大都会へやってくる。初めて都会へ出るタヌキたちは驚きの連続。「夜なのに、どうしてこんなにあかるいんでしょう。おかしいことに、だれも気がつかないのかしら？」という言葉には、便利な都会に住むことに慣れきった人間への問いかけがある。自然の中で暮らす

タヌキの視点で見ると大都会に住む人間の生活が不自然で異様であることが理解できる。不思議な物語と絵の中に文明とは何かを問うテーマが潜んでいる。おじいさんタヌキと赤ちゃんタヌキだけが化けられずタヌキのままというのもほほえましい。

『あめだま』は最終選考委員全員が強く推した人形写真絵本の傑作。一人ぼっちの少年がふしぎなあめ玉を口に入れると、耳には聞こえないはずの声や音が聞こえる。孤独な少年の心理が、しっかりした人形の造形力と精密な背景のセット、見事なライティングとカメラワークによってリアリティーをもって迫ってくる。冒頭からエンディングへ向かう展開の仕方は、コマ割りあり、クローズアップあり、文字の造形的な工夫あり、さらに色調の展開もよく考えられ、優れた短編映画を見ているような気持ちにさせられる。長谷川義史の関西弁の翻訳文もいい。

選には漏れたが、コロンビアの社会問題を背景に父親を失った少女の微妙な心理を深く描いた『いっしょにかえろう』(岩崎書店)、言葉の音とは何かを絵と虫語で展開した『なぞこのっぺ?』(フレーベル館)も意欲的な作品で印象に残った。

(まつもと・たけし=絵本・美術評論家、ちひろ美術館常任顧問)